

ギュスターヴ・クールベ《セーヌ河畔のお嬢さんたち（夏）》の考察 —画家の女性観の解明に向けて—

天王寺谷千裕（京都大学）

レアリズムの祖ギュスターヴ・クールベ（1819-1877）が1857年のサロンに出品した《セーヌ河畔のお嬢さんたち（夏）》（パリ、プチ・パレ美術館）は、娼婦を神話的偽装に頼らず直截的に表現したとして非難を浴びた。社会主義者プルードンは本作を第二帝政下の女性に対する皮肉としたが、この論調は広く認識される一方、画家自身の女性観は等閑視される傾向にある。先行研究においてもP. チューは本作を都会の悪徳の表象と解釈するなどプルードンの影響は大きい。確かにクールベの女性への態度は《世界の起源》等の官能的な作品のために男性中心主義的と判断される傾向にあるが、その実、彼の分岐点となる作品には複雑な女性表象が見られ、慎重な検証を要する。娼婦という職業を描いた本作は画家のジェンダー観を紐解く好例だが、従来この点は軽視されてきた。そこで本発表では本作を次の二つの観点から分析し、具体的にどのような芸術的企図と女性観及び社会的意識を持って本作が制作されたのかを明らかにする。

第一に、M. アダがジョルジュ・サンド著『レリア』の挿絵との関連を指摘して以来議論の続く視覚源泉の問題を扱う。文学的着想源が有力視された本作だが、肉感的な女性描写やL. ノックリンらが指摘したクールベの17世紀オランダ絵画への傾倒、そして北方諸国への渡航歴を鑑み、彼が実見した17世紀北方絵画を詳細に検証した。結果として、本発表では新たに17世紀フランドルの画家ヤーコプ・ヨルダーンズを源泉として提示する。フランスアカデミーにおいて長らく傍流とされたヨルダーンズは19世紀左派芸術家にとって新奇な美の規範であり、1853年に独立したベルギーへの憧憬も重なり、反体制的な「農民画家」として自由主義・共和主義的な解釈を付されていた。実際に、本作に加えて《浴女たち》や《法話の帰り道》等の挑発的な作品にヨルダーンズの影響を確認できた。つまり、クールベはヨルダーンズを援用することで彼の政治的信条である共和主義を本作に投影したのだ。

第二に、本作の女性の社会階級を明らかにし、作品が内包する意味を正確に把握する。同時代批評ではこれらの女性は、娼婦の中でも様々な階級を示す語で呼称されたが、先行研究では身分の同定は示唆に留まる。そこで衣服や花束を詳細に観察し、同時代史料と照合することで、女性の身分を示す記号を読解する。彼女たちが単なる娼婦ではなく「ロレット」と呼ばれる第二帝政の新興階級であると新たに指摘するとともに、既存の階級制度や家父長社会を脅かす女性像であったことを示す。

共和主義を含意するヨルダーンズを用いて社会制度を揺るがすロレットを描いた本作はプルードンの解釈とは異なり、共和主義及び反帝政思想を根底に有する画家のレアリズム精神の発露であると結論付けられる。さらにクールベが女性を通して政治的信条を表現したこの事例は、男性中心主義とされた彼の女性観の再考を促すものである。